

アンテナ高く、垣根は低く、一步先を行く攻めの経営

黒木松吾・小夜子(肉用牛繁殖・宮崎県串間市)

地域の概況

黒木さんの経営のある串間市は、宮崎県の最南端に位置する。市内の中央を貫流する福島川をはじめとする河川流域は肥沃で豊富な農産物を産出。気象は日向灘を回流する黒潮の影響を受けた温暖多雨多照の南国的気候である。

串間市の平成18年度農業産出額は114億円であり、早期水稻、食用かんしょ、きんかん、肉用牛を基幹とした農業が展開されている。うち畜産は32.6億円(肉用牛は21.3億円)で、28.6%を占める。平成25年2月現在の串間市の肉用牛飼養農家は259戸あり、繁殖牛3310頭を飼養している。

また、畜産農家の約9割を肉用牛経営農家が占めており、市の基幹作物である食用かんしょや早期水稻等への堆肥供給源として重要な役割を果たしている。

経営の概要

黒木さんは昭和49年に農業大学校を卒業後、17歳で就農。翌50年に自己資金で繁殖雌牛を導入。たばこと水稻による耕種に子牛生産を加えた複合経営を開始した。その後、平成23年より肉用牛繁殖専業になり、現在は成雌牛30頭を飼養している。

平成22年の口蹄疫発生時に約3ヵ月間の人工授精自粛を経験しているが、過去10年間の平



右から妻・小夜子さん、松吾さん、息子・健吾さん

均分娩間隔は11.9ヵ月(県平均13.7ヵ月)であり、子牛出荷頭数が成雌牛頭数を上回る年もあるなど、高い生産性を安定的に維持している。

市場平均価格以下の牛を作らない徹底した飼養管理を心掛けており、過去10年の平均子牛販売価格(税込)は57万8000円(県平均45万7000円)と肥育農家のニーズにあった良質の子牛が生産されている。

経営理念は「人の一步先を行く経営」で、5年、10年、30年という先を見据えた長期的な経営計画と経営状況の客観視によって日々経営改善を続けている。その際に必要な情報は、妻の小夜子氏がつける経営簿記(ソリマチ農業簿記を利用)や繁殖記録から得ており、新技術や補助事業の情報については自身が積極的に集める。

県内生産者の分娩間隔、販売価格と比較すると、ともに県内随一であり、同規模の県内生

産者と比較しても抜群の繁殖成績、子牛出荷成績であることから、当農場は30頭規模でありながら平成26年の経常所得が957万円と高所得を達成している。

経営管理・生産技術の特色

黒木さんの経営で高所得を達成している要因の一つは平均子牛価格の高さで、平成元～26年の実績をみると、常に宮崎県平均価格を上回っている。この背景には優良母牛への更新と優れた繁殖成績、徹底した飼養管理がある。

【経済効果を加味した早めの母牛更新】

市場相場では、母牛年齢が10歳（約7産）以上の子牛は発育等の要因から市場価格が下がる傾向にある。また、母牛は7産を過ぎると繁殖成績が下がるとともに、種雄牛等の世代交代により肥育農家の好む血統と異なってくる場合がある。

このようなことから、黒木さんは繁殖成績が悪い、または悪化する見込みのある母牛の早期更新に加え、経済効果を加味して7産後から母牛を更新対象にしている。そのため、過去4年間の更新平均年齢は7.5歳で、かつ、平成26年度の母牛平均年齢は4.3歳となっており、地域平均5.5歳と比較して1.2歳ほど若い。

さらに、肥育農家から自身が出荷した子牛の枝肉情報を入手し、母牛の血統構成も考慮に入れ、市場ニーズに合わせた優良母牛の更新を行っている。

【優れた繁殖成績】

飼料給与と同時に1日に4回、母牛の状態を確認することで発情兆候を見逃さず、分娩後60日で兆候が見られない場合には獣医師による診察を受けることで高い繁殖成績を実現している。実際に過去10年間の繁殖成績をみ

(表) 経営実績 (平成26年)

経営の概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)		家族・構成員	1.2人
			雇用・従業員	0.0人
	成雌牛平均飼養頭数			28.1頭
	飼料生産	実面積	790 a	
	年間子牛分娩頭数			25頭
年間子牛販売頭数	雌子牛 (肥育素牛生体販売)		9頭	
	雄子牛 (肥育素牛生体販売)		18頭	
収益性	所得率			56.6%
	成雌牛1頭当たり売上原価			394,505円
	うち購入飼料費			109,042円
生産性	繁殖	成雌牛1頭当たり年間子牛分娩頭数		0.89頭
		成雌牛1頭当たり年間子牛販売頭数		0.96頭
		平均分娩間隔		11.9ヵ月
	雌子牛	販売日齢		294日
		販売体重		278kg
		日齢体重		0.946kg
		1頭当たり販売価格		586,687円
	雄子牛	販売日齢		275日
		販売体重		297kg
		日齢体重		1.080kg
		1頭当たり販売価格		645,930円
	粗飼料	成雌牛1頭当たり飼料生産延べ面積		42.8 a
		借入地依存率		67%
飼料TDN自給率		80%		

ると、県の目標である1年1産をほぼ達成し、平成26年の平均分娩間隔は11.9ヵ月、成雌牛当たりの出荷保留頭数は1.07頭と、優れた繁殖成績を残している。

また、平成26年の受胎頭数は30頭で、平均授精回数1.4回、初回授精受胎率72.0%であり、発情の発見や母牛の飼養管理が確実に行われている。

飼料給与体系は分娩前後の増し飼いを粗飼料のみで行うことが特徴である。高い飼養管理技術によって濃厚飼料に頼らずに良好なボディコンディションを保ち、理想的な分娩間隔を維持している。また、分娩10日前からビタミンを給与しており、分娩後に胎盤の停滞がなくスムーズに体外へ排出されるよう産後の経過にも注意を払っている。

【徹底した子牛の飼養管理】

飼料給与を1日4回（6時、11時、15時、18時）に分けて行うと同時に、必ず子牛の体調を確認し、15時までに異常を確認した場合は獣医師の診断を当日中に受ける。特に、離乳前の子牛については日々便の色を確認して異常を見逃さないようにしている。

粗飼料はチモシーとオーツ、稲ワラを個別に調整して与えており、試行錯誤のうえ完成させたチモシー主体の給与体系は約20年間変化していない。

また、子牛へ与える乾草を成長に合わせた長さへ細断して給与することで第一胃の発達を促すような管理に努めている。その他、牛舎スペースは1頭当たり9m²と広く、ストレスのない環境で増体も良い。

このような細やかな管理により、健康で増体の良い子牛に育てることを意識し、購入者との信頼関係を構築することで肥育素牛、繁殖素牛として高い評価を受け、販売価格の向上につなげている。

【分娩時期の平準化と牛舎の効率的利用】

1年1産を確実に達成し、年間を通して均等に子牛が産まれるよう逆算して育成牛を導入すること等により、繁殖雌牛の分娩時期を平準化することに成功している。

特に注目すべきは、宮崎県で口蹄疫が発生した平成22年4月下旬～7月中旬に行われた

約3ヶ月間に及ぶ人工授精自粛の影響を最低限に抑えていることである。人工授精自粛の影響を受けた母牛の受胎時期が平成22年7月中旬以降に集中した結果として平成23年2月～4月にかけて子牛が生まれず、5月に8頭が産まれている。

しかし、前述の8頭のうち、5頭は徹底的な分娩間隔短縮により3月下旬～4月に分娩するように仕向け、それでも対応できない2月～3月中旬についてはこの期間に分娩可能な繁殖牛を3頭導入したことで、翌年には見事に分娩時期が平準化されている。

県内の繁殖農家の多くが口蹄疫による影響を抜け出せずにいた時期でもあり、先駆けて対策を講じた高い計画性と経営感覚がうかがえる。

このような高い計画性によって繁殖雌牛の分娩時期が平準化され、特定の時期に分娩房や子牛育成房等に過剰な負荷が掛かることなく、効率的な牛舎の利用が可能になるとともに、労力の分散が図られている。また、牛舎にも工夫をし、子牛が短期間に集中して産まれた場合は柵の位置を調整することで牛舎内の間取りを柔軟に変更し、ゆとりある飼養管理を行っている。

【リスクヘッジを意識した飼料生産】

長年、たばこや水稻栽培との複合経営で培った経験から田畑への施肥管理も適切で、



哺乳の様子



牛舎の様子



早期米と加工用米の2品種を作付け、リスクヘッジを図る

適期刈り取りにより良質な粗飼料を生産している。自給飼料生産は実面積790aで行っており、一般的に母牛1頭当たりが必要とされる15aの1.8倍である28.1aを確保している。収穫延べ面積は1,203aで、夏作が飼料稲377a、ヒエ143a、ローズグラス270aで、冬作がエン麦143a、エン麦とイタリアンライグラスの混播270aとなっており、年間を通して良質な粗飼料が安定的に得られる体系を確立している。

粗飼料を多く生産する理由は天候不順や倒伏により必要量が確保できない場合に備えたリスク軽減で、年間で見ると必要量よりも約3ヵ月分は粗飼料に余裕を持っているほか、特に子牛給与分の稲ワラについては1年以上の余裕を持つようにしている。

稲ワラは刈り取り時期が10日ほど異なる2品種（早期米と加工用米）より得ており、天候による影響をどちらか1品種が受けた場合においても稲ワラが確保できる体系としてい



子牛給与分の稲ワラは1年以上の余裕を持つようにしている



オガコ置き場、繁殖牛房では敷料を5日に1回交換する

る。さらに、それでも確保できなかった場合は、飼料稲のひこばえ（再生稲）を12月に刈り取ることで確保する仕組みとなっている。

地域への貢献

近隣の水稻農家より70a分の堆肥交換で毎年4tの稲ワラを確保している。また、近隣の高齢化した農家が持つ遊休水田を借り入れ、飼料稲の生産に利用することで、地域の農地保全に貢献している。ふん尿は堆肥とし、水稻農家との稲ワラ交換や自家利用で全て利用することで土地還元型の環境保全が確立している。

また、牛舎はフリーバーンで直下型換気扇を設置して換気を良くして牛床を適度な乾燥状態に保っている。敷料はオガコを利用しており、繁殖牛房で5日に1回交換し、子牛育成房は1日に1回ふんを取り除き、臭いのない良好な牛舎環境を保ち、周囲への臭気に気を配っている。

地域の若手育成にも積極的に取り組んでいる。宮崎県普及指導協力委員として地域の技術向上に貢献した経験やJAはまゆう生産牛部会串間支部長を務めた経験もあり、自身の農場を研修先として若手後継者の受け入れを行っているほか、個人的にさまざまな場で自身が持つ知識や技術を惜しみなく伝える草の根活動も長年続けており、串間市だけでなく宮崎県にも多大な貢献をしている。

生活の視点の配慮

夫婦二人三脚で経営を行っており、日々互いの体調や作業の進捗状況を確認しながら負荷が1人に集中しないよう心がけている。常に計画的な経営体系をとっているため、休日や余暇が必要な場合には作業を前倒しすることで対応できるゆとりを持っており、実際に妻の小夜子さんが産まれて間もない双子の孫の世話を手伝うために60日程連続して休みを取ったこともある。

将来の方向性

今後は70歳までは現状を維持する意向で、安定して継続するために省力化に取り組む必要があると考えている。現在、省力化の1つの方法として試験的に牛舎近くの水田で放牧に取り組んでおり、高騰を続けるオガコ節約によるコスト軽減も見込んでいる。

子牛の質を下げることなく省力化や経費削減を進めることが今後の課題であり、更なる収益性の向上を目指す。

経営への支援活動

串間牛研究会は、串間市の肉用牛多頭経営者7人による肉用牛繁殖経営についての研究活動を目的に結成されている。活動歴史は長く昭和60年より始められ現在まで継続されている。

当初の主な活動内容は、子牛セリや育成品評会の参加とその結果についての検討会・意見交流会であった。平成5年に活動の一環として、年間経営収支について取りまとめ、その成果に対し勉強会も実施していこうと、経



第10回全国和牛能力共進会 第4区主席

営診断指導対象として宮崎県畜産協会のグループ指導を受診するようになった。

内容としては年間数回の記帳会を行い、収支の記帳や家畜の動向について整理し定期的の実績報告を行っている。年間の繁殖経営実績が集計されるとグループ員全員の実績を一覧にして公表、その結果を励みに切磋琢磨していった。

平成10年から繁殖経営実績のうち販売価格、生産原価、分娩間隔など12項目において順位をつけ点数化、年間で最も成績の良い経営者が翌年のグループ会長になることとし、以降の約10年を現会長の黒木松吾氏が務めている。

各会員の牛舎を全員で巡回視察する取り組みも行っており、意見交換により自身の現状を客観的にとらえ、効果的に飼養管理の改善に努めている。このように構成員が主体となり自ら経営改善に取り組んだ結果、飼養規模も平成25年末において会員7戸の平均75頭と、串間市繁殖基盤の中心的存在となっている。

また、近年では技術向上により当会員が全国和牛能力共進会や県共進会への出品で優秀な成績を収めている。